

親鸞と出会つてから見えてきた 文化大革命

張偉
zhang wei



一九六六年～一九七六年にかけて、中国は文化大革命の時代であつた。文化大革命と革命のリーダーである毛沢東についての評価はさまざまであるが、文化大革命は毛沢東が犯した大きな過ちだという評価はほぼ定説になつてゐる。私自身の文化大革命と毛沢東についての受け止めも、時代の変遷の中で、自身の成長に従い、変わつていつた。

毛沢東はだれよりも人類文明の歩みの方向の過ちとその弊害に気付き、それを是正しようと、文化大革命を引き起こしたのではない

かと思う。また、農民が社会や文化の中心的な扱い手になる国家を作るのも農民の息子としての毛沢東の宿願であった。しかし、毛沢東は、十分自分の考えを表す言葉を持たなかつた。それゆえ、彼の発想は、自分自身の言葉によつて歪曲されてしまうのであつた。それはさらに、彼の部下たちのそれぞれの都合によつて歪曲され、さらに十億の中国人口それがどの都合によつて利用され、歪曲されていった。そこにいびつな文化大革命が生まれ、拡大していった。最晩年の毛沢東は、孤独で、さびしかつたようである。最初の発想は壯麗で偉大だつたが、結果はあまりにも惨めだつたからである。

ハイネの詩に「彼が蒔いたのは龍の種だが、収穫したのは蚤だ」という文がある。この詩文は毛沢東にささげるのに最もふさわしいと思われる。

私は、今人類が直面している環境危機や政治と経済の行き詰まり、また現代医療や学校教育などますます深刻になつてきた現代の諸問題を見るとき、当時、毛沢東が掲げたストーリーを思い出し、彼の発想にうなづけるところもある。

しかし、そうした理想を掲げた一方、生身の人間としての毛沢東とそれを取り巻く人々の欲望は次第に拡大していった。毛沢東は、自己の権力を維持するために、中國人民に「人

民の敵と戦おう」と号令を出した。そのため、文化大革命という文化的な革命の裏には、すさまじい人間闘争が繰り広げられることになつた。中国人民はその闘い、殺し合いの中に巻き込まれた。こうした時代の中、私は医者の娘として、日本のスパイの娘としての辛さをたくさん受け、心身ともに深く傷つけられた。

長いあいだ、そのような人間の残酷さとは一体何なのかということについてずっと考えてきた。

二十数年の年月を経て、私は親鸞と出会い、仏教を深く学ぶ中で、文化大革命時代に残酷なことをした人間の本質が見えてきた。仏教、親鸞は人間を三毒に囚われる存在として捉えている（『真宗聖典』東本願寺出版部 三五四頁、五六一頁参照）。三毒はまた「三根」とも言われ、すべての罪惡煩惱の根源である。三毒の元は愚痴である。愚痴を元にして、人間の心から常に貪欲や愛欲が生じてくる。欲望は充たされないと、他者への不平不満になる。他者とは他人だけではなく環境や運命や社会など、とりあえず自分以外の悪しきものを見つけて、怒りや憎しみをぶつけようとする心理である。

人は自身がこのように三毒に囚われながら、三毒に囚われた人間が作った社会を生きている。社会で生きている限り、人は倫理道

徳や規則、法律、あるいは良心など、みんな一定の秤を守つて、生きている。しかし、この人間社会の善惡を量る秤は確かにないものなのである。それは常に人間の都合によつて修正されたり破れたりする危うさを伴つてゐる。そういうような人間社会に生きている限り誰であつても罪を犯す可能性を抱えている。それこそ人間存在の深い悲しみである。

それを私は痛みを持つて思い知つた。一九六八年夏、医師だつた父が日本語が話せるということで日本のスパイとして糾弾され、自殺を図つた。父は私の必死の呼びかけによつて命を取り留めた。しかし、その少し前に、”日本のスパイ“の娘としてのつらさに耐えられなかつた私は、そのつらさを怒りにして父にぶつけ、悪口雑言を浴びせ、家を飛び出した。誰にもわからなかつたことであるが、それが父が自殺する道を選ぶ原因になつたと私は確信し、罪を犯したという実感は私の中に刻み込まれた。それは、闇となつてその後の私の人生に影のように付いてきた。私は罪である自身の存在を常に感じながら、その眞實に直面することができず、自分を「まかしながら日々を送つた。

文化大革命が終わつたとき、「傷痕文学」（文化大革命の傷跡を語る）といわれる文学作品がたくさん生まれた。これらの作品の大半は、善惡対立項の中で、被害者の立場に立ち、文

文化大革命の加害者を非難するもので、特に文化大革命の張本人毛沢東を裁くというものである。歴史の中の人間の罪を反省するとき、ある特定の責任者（リーダー）、あるいは特定の民族に責任を負わせて片付けようとするのは、一種の常識的な心理になつてゐるようである。

本当にこのように片付けることができれば、

問題は簡単に解決することであろう。この個別な悪人、この個別の民族さえなければ、残酷な悲劇から免れることになる。しかし、現実には、数千年来の人類の歴史の中で、個別の悪人の死によつて、一つの時代が終わつても、他の時代に、また、他の国で、他の形で同じようく残酷な悲劇が繰り返されてきた。

文化大革命の時代には、革命か反革命かという秤で、すべての善惡の判断を遂行したため、征服慾までも極端なまでに正当化された。反革命者は征服される身を強いられ、革命者はほしいままに反革命者を征服する権利を得ることになった。

文化大革命は、まさに征服慾が狂氣と言えるほどにまで最大限に發揮された時代であつた。そういう狂氣の中で中国人が数千年来培つてきた倫理道徳は、一枚の紙のように簡単に破られてしまう。征服慾の根源はやはり三毒にある。自我中心的になり、自我拡大を目指し、自我以外のもの（他者・環境）を対立

視し、支配しようというには三毒に囚われる

人間の本質である。それは一種の常識となつて、今あまりにも深く、そして広く人々の心を支配しているようである。その常識のもとで、征服慾は正当化されたメカニズムの中に組み込まれることになる。

正義のために戦う、国のために戦う、人民

のために闘う、復讐のために戦う、どれも正義のように見える。正義感にあおられた征服慾は、歯止めがきかなくなり、人間を悪循環に陥らせてしまう。その悪循環に陥つた人間は、時代の嵐に翻弄され、集団の行動に巻き込まれて、被害者になつたり加害者になつたりして、どうすることもできないものになる。

そのようなことをもできないところに親鸞の教えは一つの道を示す。

凡聖逆説齊回入、如衆水入海一味

（凡聖逆説、ひとしく回入すれば、衆水、
海に入りて一味なるがごとし）

（正信偈）

私は親鸞の思想の中で親鸞の自身の悪への自覺に最も惹き付けられる。

一人の思想家は誠実に自己の心の働きの眞実を深く追究すればするほど、普遍的な人間存在の眞実の層に入ることになる。そこに、特定の時代、特別の民族、個人の人生体験などの個別的な文化の枠から脱皮して、万人共有的心の働きをとらえることになる。執拗に自己の内面の眞実を見つめ続けている親鸞は、自身の存在の深い「惡」と出会いうと同時に、

この悪こそ、人間存在の本質であることに目を開かれた。それによつて、惡としての人間存在の絶対平等性の教えを練り上げた。

世の中の人はさまざま姿をしている。良

川が、海にたどりつくように、罪惡煩惱を抱える一人一人の小さい命は大きな阿弥陀如来の本願に導かれて本願海に流れ込む。本願海は大慈大悲の海。絶対平等の海である。

「回入」は三毒にとらわれる心が大慈大悲の海へと転換する道であり、親鸞がたどつた人生の道もあると思う。「回入」とは漢文

い人といわれる人もいるし、意地が悪い人といわれる人もいる。犯罪者もいるし、善行を積んで生きる人もいる。この全ての異なりは、仏の眼差しから見ると、衣服の色の異なりにすぎないのである。衣服を脱いで赤裸々な存在になるとき、みんな同じように三毒にとらわれる存在である。そういう意味で人間はみんな人生の根底に罪悪を抱えて生きている。

親鸞はその悪としての自覚を痛切な痛みで表している。『教行信証』には親鸞の自分自身への痛切な慚愧の声が響いている。例えば、

誠に知りぬ。悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし

〔教行信証〕〔信巻〕

呼びかける者（語り手）は親鸞であり、呼びかけられる相手（聞き手）も親鸞自身であるが、この一人の親鸞は罪ぶかい人間の中の一人でありながら、その身には、すべての衆生の罪を背負い、すべての人間の苦しみをわが身の痛みとして受け止めているのである。

弥陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり

悪人になつた人々の悲しみや苦しみを高み

〔歎異抄〕

から見下ろすのではなくて、最も低いところに立ち、涙によつて受け止める親鸞の姿勢はこのような深刻な悪の自覚に裏付けられていいのであろう。それは今までどの思想家にも、他の仏教指導者にも見られなかつた親鸞の姿勢である。全ての衆生の苦しみや罪を自分自身の痛みとして受け止める、親鸞の姿勢なのである。

慚愧の語源は、慚は斬と心から成る。斬はざくざくと切り込む。慚は心に切れ目をいられたような感じのこと。仏教的な意味においての慚愧は、世間的な意味での慚愧と異なるところがあり、痛みを伴うものである。つまり、それは自分の悪を痛みとして感じるとき、人間存在としての悪を鋭い痛みとして感じる感覺である。親鸞は痛みをもつて、仏教においての慚愧の意味をとらえる。しかし、それは観念的なものではなく、全身心が誠実に仏教の教えに溶け込んだ親鸞の実人生の感覚から湧き出てきた生身の人間の声である。

このような親鸞の姿勢こそ、善と惡という二元対立的な常識的な心理を破り、悪循環の心理的な根源を破り、新たな心の働きの方向を示している。

私は私自身の痛切な体験を踏まえて親鸞のこの姿勢を受け止めている。親鸞の慚愧の声を聞くたびに、私は文化大革命で人を殺した紅衛兵が涙ぐんでみんなの前で謝罪する場面

を思い出す。そのとき、私は初めて、加害者と言わされたこの少年も傷んでいることを実感した。

文化大革命の時代、私は、肉親や親しい人が糾弾されたり、殺されたりすることを幼い目でたくさん見た。私は長い間、自分を被害者の場に置き、私の前で殺人の罪を犯した紅衛兵の少年を加害者の場において文化大革命について話しつづけてきた。しかし、文化大革命のとき正義のためと信じて行動したあの紅衛兵の少年は、その後心身ともに傷を負い、自らの罪にさいなまれながら生きてきたことを思い知った。また、この私もひそかに父に対する加害者である闇を抱えて生きてきた。親鸞の慚愧の声に痛みを感じるとき、私自身が彼の姿と重なつて感じられるようになつたのである。

親鸞に出会い、慚愧の意味を感覚の次元で教えられた私は、怒りや憎しみが大きな悲しみに転じられる道の方向を示された。親鸞の姿勢は時代を超え、民族を超えて、今も大切なメッセージを伝え続けている。

今、人間と人間、人間と環境などの関係がますますゆき詰まる現実に直面するとき、親鸞が全身から発したメッセージを有縁の方々とともににより深く受け止めていきたいと思う。

著書に『野間宏文学と親鸞—悪と救済の論理』（ちやん うえい・同朋大学准教授）法藏館